
秋来たる

ウル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋来たる

【Nコード】

N5386U

【作者名】

ウル

【あらすじ】

私は観葉植物に如雨露で水やりをしていたとき、あることに気づく。そこから巻き起こる不条理で不可解な出来事の数々。ジャンルは不条理コメディ。……コメディ……？姉妹編には「冬来たる」「春来たる」「夏来たる」があります。嘘です。転載作品。

私がいつもの調子で如雨露を傾けていたのは観葉植物に対してであつたはずで、このように紅葉したりしまいには落葉したりしているしるものは、観葉植物ではないように思われて仕方ない。「葉」を「観」賞するのが観葉植物なのだからこれではただの植物ではないか。嫌な予感で部屋を見回すと、果たして部屋中の植物が色づいている上、床にはそれらの落ち葉が降り積もっているではないか。これは一体全体どうしたことか。私は震える手で如雨露を近くの棚に戻すと、ひとまず熱いコーヒーを淹れに台所へ入った。このようなときにはたつぷりとカフェインを摂るに限る。

一人掛けのソファーに沈みながらマグカップを手に体を温めていると、妙な違和感があつた。首筋の辺りが息を吹きかけられているかのようにすうすうと涼しいのである。かすかに扉が開閉する音が聞こえた気もしないではない。まさかと思ひソファーから飛び上がった私は、居間の北東を振り返った。

「なんてことだ」

北東にある扉は全開になっており、私の位置から対角線上にある玄関扉までまっすぐ見渡すことができた。できたのだが、実に怖ろしいのはその玄関扉もまた大きく開け放たれていたことである。

私はすぐさま行動を開始した。具体的には、音を立てないようにそろそろと尻をずらしてソファーの上を移動し、マグカップをテーブルの上に落ち着けてから、体をかがめて玄関から死角となる位置まで跳び込み前転を行うというものである。これによって私が侵入した暴漢と正面から鉢合わせする危険は心持ちにも下がり、その暴漢の処遇をしかるべき国家機関に委ねるための猶予も生まれようというものだ。しかし私はこの第一段階に差し掛かった時点、すなわち行動開始時点において既に大きな過ちを犯していた。なんとも情けないことだが、私の右手は小刻みな震えと汗腺より分泌された大

量の汗によつてマグカップの保持能力を完全に失つていたのだ。

つまり、カップは私の足元へと落下しており、その中身を床にぶちまけていたということである。もちろんそれは隣家まで響くような盛大な音を立てて割れることを失念してくれるほどの優しさを持ち合わせてはいないのである。

私は死の恐怖に立ち尽くした。最近の泥棒はナイフや警棒、ひどい場合には銃などの武器を所持していることもあり、ひと昔前のそれよりもずっと危険だと聞く。だが正確にはこれは朝刊から得た情報であり、聞くという表現は正しくないのではないかと考えをめぐらしているうちに、カップの割れた音を聞きつけた暴漢がこちらへ迫る音が耳に届いた。

しまった。あわてて逃げ出そうとしたが、生憎私の情けない両脚は床に必死でへばりつくのに夢中で、完全に協調性を失つていたものらしかつた。そうしてソファアを抱きかかえる形で転倒した私の眼前に、ついに暴漢が姿を現した。ここまでか。

しかし、背もたれをかき抱いた姿勢で半ば死を覚悟した私の前に現れたのは、驚いたことに、秋だったのだ。

恥ずかしいところを見られてしまったものである。

「今回はずいぶんと間が空きましたね」

急いでこぼれたコーヒーとカップの破片を片付け、玄関扉を閉めて錠を落とすと私は秋をテーブルに案内した。初対面ということもあるが、やはり秋である。思わず慣れない敬語を使ってしまうような独特の雰囲気身をまとっている。ただもしこれがまかり間違つて冬などであれば、私も完全に萎縮してしまうところであったが。

台所の食器棚から来客用のカップを取り出すと、コーヒーを注いで秋の前に置いた。

「なにぶん急にいらっしゃられたので、なにも用意できていなくてあわてていたからか先ほどいつもより多めにコーヒーを淹れてしまっていたのが幸いして、何も出すものがないとまではいかなかつ

た。ただ直前に大いに醜態を晒してしまっていたので、それも帳消しかもしれないと思うと穴を掘って地球の裏側に逃走したい心地になる。

私は割れたマグカップを落ち葉と共に片付けて、新しいものを取り出してくると秋の向かいに腰を落ち着けた。

「いやあ、急に葉に色がついて。驚きましたよ」

先ほど私が熱いコーヒーを求めるほどに動揺した一件の真相は、まるつきり秋の訪問によるものだったのである。常緑樹まで色づくという事態はさすがに私の想像を超えていたが、これも秋ならではことなのかもしれない。

「いえいえ。気になさらなくても」

事情が飲み込めたらしい秋に、私は軽く手を振って否定する。

「最近はこちらへのご訪問もめつきり少なくなつて、心配していました」

それきり私たちは世間話に花を咲かせることとなつた。世間話といつても秋相手に私の近況などを話しても仕方がない。私は二月頃から話題となつている、世界有数の産業立国である某大国がとある辺境諸国に対して仕掛けた戦争に関して話し始めたが、予想していた以上に秋は世間の情勢に疎く、私はその話題を早々切り上げて近年の異常な気象変動という慣れない話題を持ち出すことになった。

だがその浅はかな考えは秋によって早晩打ち砕かれ、

「はあ。なるほど」

私は自分の乏しい知識を恥じながら頷くばかりであった。

「さすがです。いえ、謙遜なさらなくとも。やはり自分自身で体感なさっている方はちがいますな」

乾涸びた下唇を舐めながら私は、言葉の接ぎ穂を探していた。

これまでも全体から見れば一瞬の訪問ではあったのに、年を追うごとにその期間は短くなつてきており、秋もこのような時間を過ごすのは久しぶりであろうと思われる。それを私の拙い会話で台無しにしてしまうことは、郷里でも半ば権威を失いつつあるとはいえ、

室町の豪農に端を発する我が芳村家の名に恥じるものだ。私が少ない引き出しをサルベージして話題の引き上げにかかった、それはそのときであった。

玄関扉をまさしく暴漢の如く激しく叩く者があつたかと思うと、
「芳村和之！ 貴様は公共自然物独占禁止法、通称自独法に抵触した！ そこにいることは既に了解済みだ。すぐさま武装を解除し、秋を解放した上で尋常に投降しろ！ 尚、この建物は既に我々公共自然物保護協会直属強行押収隊、通称強収隊によりぐるりと包囲されている。貴様のいかなる抵抗や弁舌も無意味であるからそう思え！」

低い男の声が雷のような大音声でのたまつて、私の鼓膜はこれまで経験したことのない激しい振動に直面した。節回しなど多くの違和感を残しつつも声が一息に告げた文言は、私を公共自然物独占禁止法、通称自独法に抵触したとし、公共自然物保護協会直属強行押収隊、通称強収隊に投降を促すものであると、少なくとも私はそう理解した。

「どついついことだ」

しかし私はいたく混乱した。なぜならば自独法という言葉も、公共自然物保護協会なる組織も、もちろんその直属である強収隊などというものも、私は未だかつて耳にしたことがなかったからだ。何より私の名前は和之ではなく和紀である。私はソファアーの上の秋にちらりと視線を送つてから、北東の扉の横へ据え付けられたインターホンへ急いだ。明朝体で「モニター」と書かれたスイッチを押すとカチ、とはまる音がしてインターホンの上三分の二を占めるモニターに粒子の粗いカラー映像が現れる。

途端、私は驚きに目を丸くしそうになった。当然眼球が球体であることは周知の事実であるので、この場合のこれはまなじりを一杯に開きそうになったということである。かくて私のまなじりを裂かんと息巻いて画面に映し出された不埒な映像は、我が家自慢の美し

い前庭を蹂躪するように立ち並ぶ大勢の兵士たちの姿だったのである。むろん私が住むこの民主国家には軍隊は存在せず、よって兵士と呼ばれる者も便宜上とはいえ存在しないはずではあったが、しかしそれはまさしく兵士としか形容のできない者たちだった。姿は力一キ色の目出し帽とつなぎで統一されているため判然としないが、おそらくは全員男と思われる者たちは、手に手に大型の銃器らしき黒々としたものを抱えている。私の知らぬ間にどのような事態が発生していたとしても、一般の人間があのような物騒な輝きを放つものを携帯しているはずはない。私の乏しい知識を総動員してもあのような格好で整然と整列している集団はおよそ軍隊以外に想像がつかなかった。

「こんなことがゆるされるといふのか」

しかし仮にそうだとしても、この真昼間からあのように十数人で他人の敷地内に踏み入って、それもあろうことが私が精魂込めて育てた沢山の美しい花々が立ち並ぶ花壇を踏み荒らす道理はない。半ば怒りを込めて私はつぶやいた。

混乱と憤慨から醒めたのは、モニタに表示された映像が自動的に消える小さな機械音のせいだった。ここにきてようやく、秋をまったく放置していたことに思い至り、謝罪の言葉を口にしながら私は背後のソファアを振り返った。そこには憂慮したほど不機嫌ではない様子の秋がいた。

「申し訳ありません。少々混乱してしまつて」

言い訳がましい口調になつてしまふのがなんと情けなかったが、「私もいまいち事情が飲み込めないのですが、どうやら外へ出て話し合いを持つ必要があるようです。申し訳ありませんが一緒に行つていただけますか」

とにかくそう説明して私は秋を促した。秋は特に不愉快な様子も見せずにソファアから下りるとこちらへとやって来て廊下へ出た。居間の扉からちょうど直線上にある玄関扉はこの家を建てる際に私

がこだわった点の一つでもある。わざわざ欧州の職人に発注して作らせた複製不可能な錠前と、一本の大木から削り出した頑丈な扉と、そこにはめこまれた芸術的な細工の曇り硝子。扉の内側には装飾がないが、それもまた重厚な貫禄を醸し出して良い。こんな不可解な状況のせいかいつの間にか意識が眼前に待つ事態から逃避していたらしく、そんな風に扉を愛でながら靴を履くと、私は扉を重々しく開け、秋と共に文字通り戸外へと踏み出した。

「投降だ！ 容疑者が投降したぞ！」

「確保しろー！」

「抵抗をやめて投降するんだ」

「容疑者を抑えろっ」

私の革靴の爪先が家屋から数センチ出た途端、前庭に叫び声が満ち、金属やブー2011/06/08ツのがしゃがしゃという音と共に男たちが私に殺到してきた。目出し帽の奥の目には殺意にも近い感情が見え、手に持った銃器の先端は明らかに私に向けられている。玄関扉を開いたときの怒りにも似た勢いは急速に衰え、私の全身は私の支配から脱そうと画策し始めた。

「保護だ！ 秋の保護を最優先しろ！ 容疑者は抵抗するなら射殺しても構わん！」

男たちの向こうから聞き覚えのある低音が叫んだ。それはつい先刻私に罪状を読み上げた、この強収隊とやらのおそらくリーダー格と思われる男のもの。それを認めてからやっと私は、その男が口にした言葉に気づいた。容疑者は射殺しても構わない。この場合の容疑者は私のことであって、すなわち射殺される可能性があるのは、真に残念ながら私であるということだ。

額から両耳の上辺りまで、電流のようなものが一気に進った。それは後頭部に集約すると、弾けるようにして私の全身を包み込む。それは未来にも過去にも偏在し人間を支配する、普遍不動の絶対的な感覚である。私はそれをついに、三時間前にも体感したばかりであったが、しかし今回私の全身を包んでいるのはそれよりも遙かに

大きくて強靱なものであった。その名を、死への恐怖、という。

声を上げていた。気づけば私は、あらん限りの大声で言葉にもならない咆哮をしていた。続いてダダダ、と炸裂音が響き渡り、ほぼ同時に焼きごてのような熱い痛みが耳元を掠めた。それは銃弾が私の側頭部を擦過したということを示していた。

「撃て！」

「殺せーっ！」

男たちは興奮に声を上ずらせ、つられたように次々と銃口を私に向け始める。耳元の熱が恐怖をかき消してしまつたのだろうか、私は思いのほか冷静に眼前の景色を眺めていた。初めに撃つたと思われる男は尻もちをついて倒れており、目だし帽がずれて青白くなつた表情が露わになると、彼らが私と同じ普通の人間たちであるのだとわかつた。一人ひとりの男たちが引き鉄にかけるその指一本一本すら、次第にはつきりと見えてくる。

数瞬前とは違い、死が近づいてくるのを見ても私の心は乱れなかつた。ゆっくりと両目を閉じて、ただ冷静な諦観へと身を沈めて行くこととしたとき、

「やめる、撃つな！ 撃つんじゃない！」

隊長と見える男の例の低音が、前庭へと轟いた。私は何ごとかと目を開き、そしてその目を疑つた。私の前には敢然と仁王立ちし、男たちの前に立ちふさがる秋がいたのだ。隊長の声はしかし男たちの指の動きを止めるには遅すぎて、放たれた銃弾は次々と秋の体で炸裂しその鮮やかな橙の体液は私へと雨の如く降りそそぐ。

「貴様らなんてことを　！」

向こうから走り寄ってくる隊長の声は虚しく響き、秋は玄関ホールの石造りの床へどうと倒れそれきり動かなくなった。私はその光景を半ばブラウン管の向こうの出来事のように認識しながら、体液にまみれた自分の両手を呆然と見下ろした。燃え上がるような鮮烈な橙は私の見る間にぐんぐんと色褪せていく。鮮やかな橙が湿つた枯葉に似た薄汚い泥色へと変わっていくその様子は、ひたすら愚直

にくり返される日々の嘗みの名残のようでもあつたし、相も変わら
ずに変わっていくものへのかすかな皮肉のようでもあり、私の胸を
なぜだかざわめかせて、締めつけた。

どこからか冷たい北の風が吹いて、私はひとつ身震いをした。

秋来たる 了

(後書き)

本作はオンライン文化祭 2009・秋 提出作品です。お題は「秋」でした。

えーと、ん、あー、ええと、その、ちょっとなにいつてんのかわかんないと思うんですけどもー、作者もいまいちよくわかってないですねー(ひどい)

シユールとか不条理とかコメディとか面倒くさい一人称とかそういうものを目指して書いたような気はするんですけどちょっと記憶が。

ちなみに色々ツツコミの来そうな「秋」の正体に関してはそのまんま「秋」、擬人化された季節の「秋」です。特に寓意はないです。なんか秋に一言も発させないとかちよこざいなこととしてます。

ともあれ、わけわからねえ……なんだってんだ……?!と頑張ってくだされば狙い通りですありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5386u/>

秋来たる

2011年7月3日03時36分発行